

## 14期 ミュージアムへ行こう5

### 第1回テーマ 上村三代と京都市立芸術大学

#### 事前学習：

- 《1》 講座日時：2026(R08)年 04月 23日(木) 10時-12時
- 《2》 講座場所：豊中市くらし館3階
- 《3》 講師：松伯美術館 学芸員 秋山美津子先生
- 《4》 概要：ミュージアム5では美術館鑑賞や史跡見学の前に、専門家による解説講座が開催されている。(\*)

今回は、来週の「上村三代と京都市立芸術大学 at 松伯美術館」への鑑賞に先立ち、秋山先生から説明を受けた。上村三代や展覧会の裏話をお話しされ、内容も大変興味深い講座であった。

来週(4月30日)の鑑賞会がとても楽しみです。

(\*) この講座で実施されている、事前に専門家からレクチャーを受けるというシステムは、鑑賞や見学の際に非常に有効で、受講生には大変ありがたい。実行されておられるCAさんたちの裏での苦勞が偲ばれ感謝です。

#### 《5》 講座の内容

① 日本画家 上村松園・松篁(しょうこう)・淳之(あつし) について  
女性として初めての文化勲章受章受賞者である松園、その長男である松篁、その長男の淳之と、三代にわたって文化勲章受章を受賞という、きわめて稀な一家。

文化勲章受章受賞年 (松園：1948年、松篁：1984年、淳之：2022年)

② 3人の大学とのかかわりはそれぞれである。

**松園**：画学校に入学できたことを大変喜んだが、美人画を描きたいのに入学当初は風景画しか描けず1年で退学して、鈴木松年の画塾で学ぶ。

**松篁**：画学校、画塾ともに長期間そこに携わった。

**淳之**：当初は建築志望であったが、小磯良平の絵をみて、大学入学以降に絵を描き始める。

③ 描きかたについて

**松園**：スケッチにも筆を用いている。つねに筆を用いることで繊細な線が描ける。

**松篁、淳之**：スケッチに筆は用いず、鉛筆やボールペンを使用。

④ 松篁についてのエピソード(松篁の父親は鈴木松年ではないか、といわれている)

・鳥が好きで、平城京の北に画室「唳禽荘(れいきんそう)」を構え、1000羽の鳥を飼って写生していた。

ある時、放し飼いにしたクジャクが平城京まで飛んで迷子になった。警察から連絡があり、引き取りにいくと、クジャクが安心した顔をした。(ほんまかいな) 警察署からクジャクを引き連れ自宅まで歩いて帰ってきた。

・被写体として動く鳥などの方が花に比べて写生しにくいように思うが、実は、花は日々変化し、本当の見ごろを捉えるのが難しい、とのこと。

・画学校入学までに賞も受賞していたが、入学して、入江波光から「こんな概念的なものの見方をして、どうするんです」との言葉に衝撃を受けた。

後には入江からも認められた。

⑤ 日本画の下絵

・展覧会では下絵も展示されている。日本画の下絵は「下書き」ではない。

日本画は絹などに描くが、やり直しが利かない、そのため下絵は本番そっくりに描く。

## オリエンテーション：

① 昼食のあと、CAさんから「クラス運営について」、「気象異常時の対応」などの説明を受け、班ごとに班長、副班長などの選出を行った。

(CAさんの説明よろしく、スムーズに進みました)

## 実際の鑑賞：

《6》 見学日時：2026(R08)年 04月 30日(木)

近鉄奈良線の学園前駅の北と南に近接する二つの美術館を鑑賞した

- ① 10時-11時:松伯美術館
- ② 近鉄・学園前で昼食
- ③ 13時-14時:大和文華館

《7》 松伯美術館

- ① 上村家からの作品の寄贈と近鉄からの基金の提供により、近鉄の名誉会長・佐伯邸の跡地に開館した。(1994年)

広い溜池に隣接した静かな環境にある(左)。

雨を避けて全員集合を待つ(右)。



- ② 館内は松園、松篁、淳之ごとに展示室が設けられている。松篁、淳之の展示室は大きく、作品も大ぶりなものであるが、松園の展示室は小さく、また展示されている作品も13歳時の習作を入れて3点のみであった。
- ③ 基本的に館内は撮影禁止で、松篁作品が1点のみ撮影できた。（「母子の羊」）



- ④ 庭も大変手入れがいきとどき綺麗であった。



《8》 1班6名は学園前駅近くの「麺どころ わこん」で昼食。  
(onccの以前のクラスで一緒だった方もいらしたことが判明)



《9》 大和文華館の鑑賞

① 緑豊かで大変静かな小高い丘の上に位置している。



② 展示のテーマは「想いを伝えるもの～和歌、手紙～」  
・和歌を彩る書と料紙 ・勅撰和歌集の版木 ・物語のなかの和歌 などのテーマごとに多数展示されていた。 また撮影も OK であった。

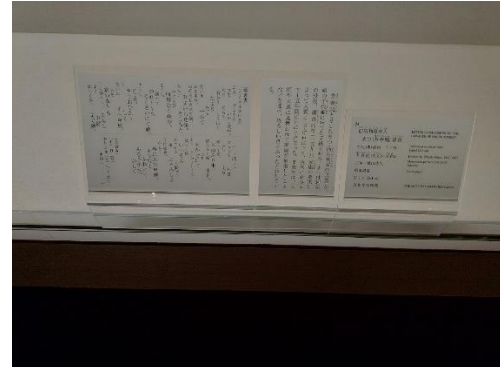
寢覚物語絵巻（国宝）



美人図



前田利家の正室が娘にあてた手紙（左：実物、右：現代語訳）



●●● 二つの美術館ともに日本の和を感じ、大変有意義な鑑賞会になりました。最後に、雨のなか長時間バス停(大淵橋)で受講生を誘導されたり、三々五々やってくる受講生の出席確認や資料配布に尽力いただいた2名の女性CAに感謝いたします。

(ブログ担当：1班岩井)